

<知的・情緒障害教育>

生徒の自立を目指した学習指導の研究 — 学習効果を高める学習指導法の工夫・改善を通して —

北中城村立北中城中学校教諭 眞 裕 美

I テーマ設定の理由

現在、小・中学校における特別支援教育は、校内委員会の設置、特別支援教育コーディネーターの指名や特別支援教育支援員の配置、個に応じた指導計画の作成と活用など基本的な体制が整備されつつある。

また、個別の指導計画には、配慮事項に個々の生徒のアセスメントに基づいた指導内容の設定、生徒が興味をもって主体的に取り組み成就感を味わえる指導内容、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を高めることのできる指導内容、さらに発達の進んでいる側面を伸ばすことによって、遅れている側面を補える指導内容等を明記することが必要とされている。

一方、文部科学省においては、平成15年に「『脳科学と教育』研究の推進方策」において、障害のある子どもについて、その障害による困難を改善・克服することを目的とした「脳科学と教育についての研究」を推進する方針を示した。また、平成18年に国立特別支援教育総合研究所紀要（第33巻）で、西牧らによって障害児教育においても新たな指導方法の開発につながる可能性を示唆している。

長崎大学教育学部附属中学校では、平成17年度から3カ年間、文部科学省研究開発学校の指定を受け、「脳科学研究の成果の活用に関する研究」を実践している。その研究では、生徒の脳の働きを高めるために、国語の漢字書き取りや数学の計算問題など、教科ごとにトレーニング用の問題を作成し、授業の直前に5分間継続して行っている。その結果、数学では回数を重ねるごとに計算速度が伸び、他教科でも同様の成果が出ており、さらに、生徒の学習意欲も向上していることなど、生徒に効果が出ていることが示されている。

北中城村立北中城中学校の特別支援学級（以下「本学級」とする）では、知的障害のある生徒や情緒障害の生徒が混在している。学級の雰囲気は、全体的に明るく落ち着いている。生活面では、基本的生活習慣は身に付いているが、生徒一人一人の行動が多様である。また、家庭への連絡が伝わらなかったり、生活日誌への記入が不十分であったり、掛け算九九を完全に覚えていないなど課題も多い。

さらに、学習指導では、主に基礎的なものを中心にドリル学習や漢字の練習等を繰り返し行っているが、学習の進歩が見られない状況である。また、学校生活全般においても、係活動や行事の参加において積極的に取り組む姿勢が見られず、ただ教師の指示を待っている状態である。このような状態を改善するためには、生徒自身が意欲的に学習に取り組むことが重要である。つまり、生徒ができたと感じる指導方法や効果的な学習指導の工夫が必要であると考え。特に、生徒のアセスメント（実態把握）を踏まえた学習指導の工夫・改善を行うことで、生徒のできる喜びや達成感につながり、意欲的に学習活動に取り組むようになる。また、生徒の自立をしていく力を目指していくためには、生徒個々の力を発揮させ、様々な活動に積極的に取り組む学習指導の工夫が必要だと考える。さらに、本学級の生徒は、自立に必要な力である「コミュニケーション」や「人間関係の形成」「心理的な安定」（特別支援学校学習指導要領解説自立活動編平成21年）に関しては、進学等を含めた将来の進路を考える上で必要不可欠であり、そのことを個別の教育支援計画、個別の指導計画の目標に設定し学習活動等に取り組むことが大切である。

そこで本研究では、生徒個々のアセスメントを踏まえた学習プログラムを基本とし、「集中力・注意力・記憶力を高めるための集中トレーニング学習」（以下「集中トレーニング」という）を「学習プログラム」に取り入れることにより、生徒の学習意欲が高まり、学習活動の向上や諸活動への積極的な行動などの学習効果が表れるものと考えた。また、「集中トレーニング」で得た達成感や成就感を体験できる学習活動を重ねることにより、心理的な安定や人間関係の形成及びコミュニケーション等の能力が高まるなど、生徒の自立を目指した力につながるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

生徒個々のアセスメントに基づき、「集中トレーニング」を取り入れた学習プログラムの授業実践を行うことで、生徒の学習意欲を高めることができ、学習活動の向上や諸活動への積極的な行動などにつながるであろう。ひいては、そのことが自立を目指す力になるであろう。

Ⅱ 研究の内容

1 理論研究

(1) 知的障害児の学習上の特性と自立を目指す指導

特別支援学校学習指導要領総則等編（平成 21 年）においては「学習で得た知識・技能が、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に取り組む意欲が十分に育っていない。また、実際の・具体的な内容の指導が必要であり、抽象的な内容よりも効果的である。さらに、教材・教具や補助用具を含めた学習環境の効果的な設定、生徒へのかかわり方の一貫性や継続性の確保、生徒に関する周囲の理解などの環境条件も整え、知的障害のある生徒の学習活動への主体的な参加や経験の拡大を促していくことが大切である」と述べられている。また、「生徒の興味・関心や得意な面を考慮し、教材・教具等を工夫するとともに、目的が達成しやすいように、段階的な指導を行うなどして、生徒の学習活動への意欲が育つよう指導する。そして、できる限り生徒の成功体験を豊かにするとともに、自発的・自主的な活動を大切に、主体的活動を促すよう指導する」としている。この主体的活動を促すこととは、最終的な目標の生徒の自立へつながることと関係していると考えられる。

生徒の自立については、特別支援学校学習指導要領解説・自立活動編（平成 21 年）「生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること」と述べている。このためには、学習活動への意欲が育つ指導方法の確立、成功体験等を重ねることで達成感や成就感を得て自信をもつことが、大切である。それにより、生徒が学習や諸活動等、積極的に取り組み、自立への力の獲得ができると考える。

(2) アセスメントを活かした指導の考え方

須田正信（2009）は、「特別支援教育を進めていく上で最初に、目前の子どもを知ることから始まり、知ることには様々な要素がある」という。その子どもの生育歴や発達の度合い、行動の特徴、学習の状態、表面的に表れない心の作用などがあり、子どもの実態像を正確に把握することが確かな指導・支援ができると述べている。

また、小田浩伸（2009）は「アセスメントから目標、指導、支援に活かすまでのプロセスが（図 1 参照 小田 2009）大切であること」を述べており、本研究においても多角的に生徒の実態を捉えることで、目標、指導、支援を明確化することができると考えた。

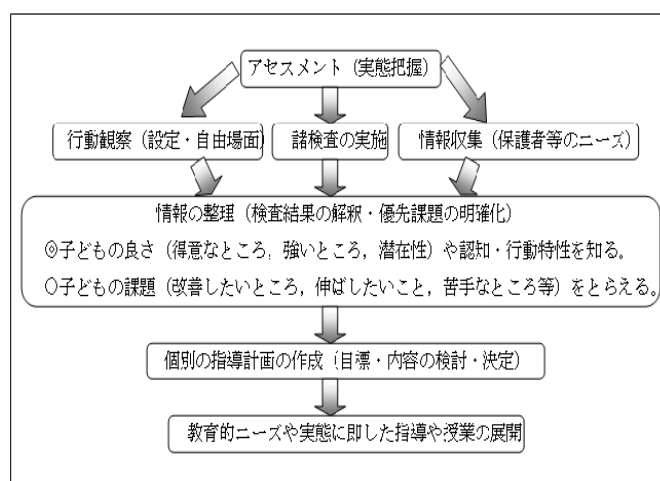


図 1 アセスメントから目標・内容設定
指導・支援に活かすまでのプロセス（小田 2009）参照

今回、中学校入学前のWISC-Ⅲ知能検査・田中ビネー知能検査Vの基本資料を参考に、知的発達の状況を把握した。また、S-M社会生活能力検査を平成 21 年の 12 月に再検査を行い、生徒の社会生活の年齢を確認した。さらに、生徒の見方やとらえ方を更新するために、生徒の行動観察を実施し、生徒への指導・支援や指導（支援）者側の指導・支援の効果の評価、及び授業改善に役立てるようにした。

(3) 集中力を高める効果的な指導

上嶋恵（2008）は、「見る」「聞く」力を伸ばす指導に重点を置き、1日の始まり、学習の始まりなどに、子どもの様子を見ながら1分程度でできる集中を生み出すトレーニングとして、線と線を結ぶ落書きや数字、言葉の聞き取り書き、反対語の書き取り等と絵カードで記憶することの実践を行っている。その結果、生徒が学習にスムーズに入れるようになり、離席や衝動性による人間関係のトラブル等の問題行動が根本的に改善されているという。

生徒が学習する場合においては、生徒が興味を示すような教材を扱うことが、生徒の「集中力」を高める上で最も大切なことである。絵カードを使った学習では、楽しんで取り組むことができ、集中力も自然とついてくる。このような観点から、「集中トレーニング」は、生徒の集中力・注意

力・記憶力を高める方法として効果的なトレーニングであると考ええる。

(4) 学習効果を高める指導方法

川島隆太（2002）は、「難しいことを考えているときよりも、音読や簡単な計算をしているときのほうが、はるかに活発に脳が働いている」とし、特に、「脳を鍛えることが、障害のある生徒へもわずかな効果ではあるが、脳の機能が高まっている」ことを示した。これは、脳の働きを良くするためには、音読や単純計算を集中的に行うことが非常に効果的であると理解できる。そうすることによって学習効果も高まるものと考えられる。

このことから、学習効果を高める方法として、生徒が興味・関心を示す絵カードによる高速学習や輪郭漢字カードによる学習などを取り入れた「集中トレーニング」を実施することが有効であり、以下その実施方法を示した。

①「集中トレーニング」の実施方法

表1 「集中トレーニング」の実施例

1	授業導入時の5分間で「集中トレーニング」を実施し、その後の10分間で解答とグラフへの記入を行う。
2	各教科別に、絵カード、写真カード、単語カードや計算ドリル、漢字ドリルを作成し、トレーニングを実施する。
3	トレーニング終了後に自己採点を行い、その成績を生徒各自でグラフに記入させ、これまでの記録の推移を確認させる。（自己の伸びの確認作業）
4	「集中トレーニング」の指導は、各教科担任が行う。

②「集中トレーニング」のカード教材の手法

表2 絵カード学習の方法（文献引用）

カード名	方 法	効 果
高速学習 鈴木昭平 (2009年)	・絵カード等を速くフラッシュさせる。 ・絵カードの説明や確認はしない。	・脳が刺激されて、記憶力が高まる。
輪郭漢字カード 向山洋一 (2003年)	・表には、絵と漢字を組み合わせたものを書き、裏には、漢字だけを書いたカードを準備する。 ・はじめに、表のカードを見せ、漢字の読みを音読させる。 ・次に、カードの裏を見せ、漢字の読みを答えさせる。	・絵と漢字を重ね合わせた視覚的な映像により、漢字の読みを長く記憶することができる。

Ⅲ 研究の実際

1 学習効果を高めるための学習指導方法

P D C Aサイクルとして、生徒のアセスメントによる授業計画の立案（Plan）、学習プログラムによる授業実践（Do）、その後の学習活動全体の評価及び改善（Check and Action）を行うことにより、授業の効率化を図ることとした。

生徒のアセスメントに基づいて、「集中トレーニング」をどのように行なえば、生徒の興味・関心得意な面を学習面に反映させ、学習効果を高めていくことができるのかを重点事項とした。

はじめに、生徒のアセスメントについて、中学校入学前のW I S C—Ⅲ知能検査・田中ビネー知能検査Vの基本資料と日々の行動観察記録と諸検査の実施（S—M社会生活能力検査・絵画語い発達検査・読書力診断テスト）により、興味・関心と得意・不得意な面の分析を行った。それらを踏まえた上で、「集中トレーニング」を取り入れた学習プログラムを構成した。

学習プログラムにおいては、まず、授業の導入で、絵カードやドリル等の教材・教具を活用した「集中トレーニング」を取り入れ、学習意欲を高めることとした。また、この「集中トレーニング」は、記憶の定着を図ることにも考慮に入れるようにした。次に、展開では、「集中トレーニング」の学習内容と関連づけたワークシートの学習に取り組めるようにした。

また、評価・まとめの時間に、生徒自らが学習の成果をグラフに表示するなど学習成果を確認することで、できた喜びや達成感、成就感が得られるようにした。

次の図2は、「集中トレーニング」を取り入れた学習プログラムに基づいた学習活動についてのP D C Aサイクルを表したものである。

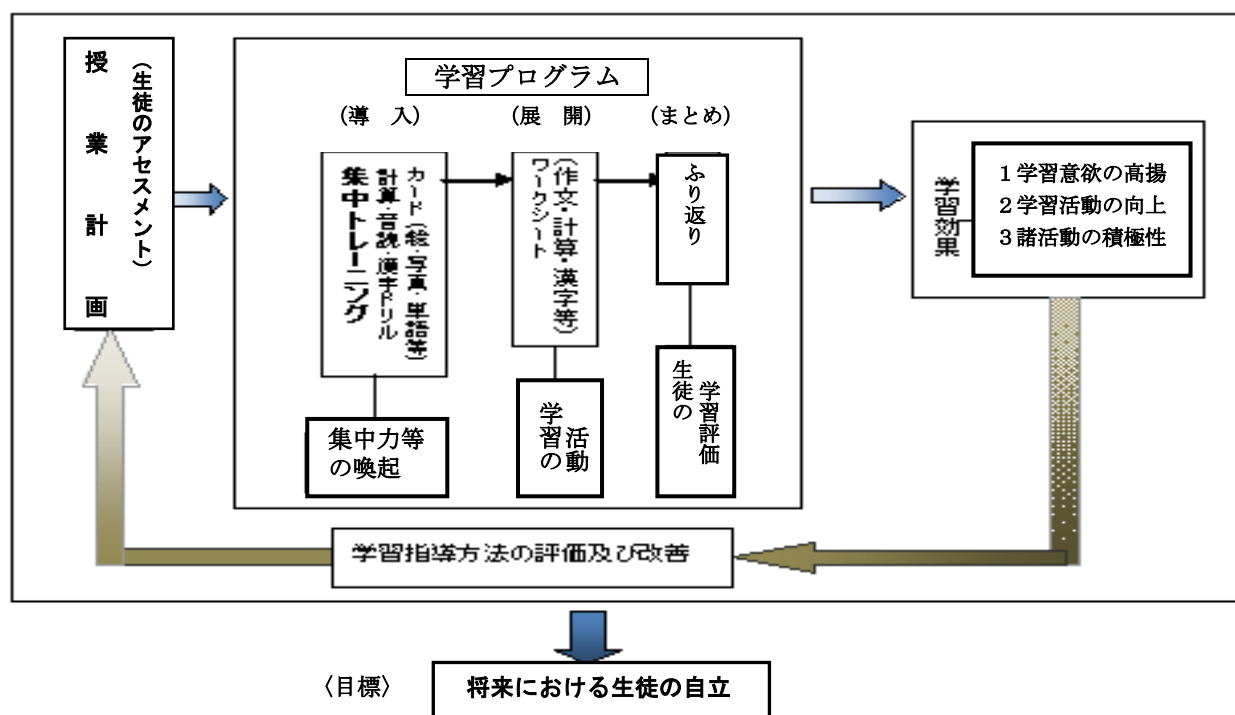


図2 学習活動におけるPDCAサイクル

2 指導の実際

(1) 検証授業1

題材：「文章力をつけよう」（国語）（平成21年11月30日）

① 「集中トレーニング」の方法

本学級に在籍する4名の生徒の中で、特に、2名の生徒（表3）に語いの理解の不十分さが見られることから、理解しやすいように絵を取り入れた視覚教材を用いることにした。

また、「集中トレーニング」の視点（表6）を目安にして、「学校」をテーマにして5W1H方式（表5）の絵カード（図3）を作成した。特に、カード作成の際は、生徒が見てすぐ理解できるように、語いや絵の選択に気をつけた。

表3 本学級の生徒2名のアセスメント（抜粋）（平成21年9月現在）

領域・教科		A	B
国語	聞く	・簡単な説明、質問は聞くことができるが、説明が長いと落ち着かなくなる。	・聞く態度は良いが、内容が理解できなくても返事しないことがある。
	話す	・わからないとすぐ質問をする。オウム返しがある。敬語は上手である。	・声が小さく聞き取りにくいことが多い。質問しても黙って答えないことがある。
	読む	・詩、絵本等を楽しく読むが、文章が長くなると理解できず棒読みになる。	・音読は、声が小さいため聞き取りにくい。
	書く	・文字を大きく書く傾向がある。二重書きや字の間の取り方が狭い。絶えず確認の質問をしながら文章を書く。	・字がきれいで丁寧である。視写もできる。誤字、促音の脱字がある。主語、述語の文体が一致しないときがある。
数学	数	・3位数まで理解できている。計算問題は積極的。九九はだいたい覚えている。	・3位数まで理解できている。引き算の繰り下がりや二位数に時々間違いがある。九九が不十分である。
	時間	・時・分・秒の使い方、読みはできる。前後が理解できていない。	・時間は読める。時間の前後が理解できていない。
	金銭	・お金の種類はわかる。実際の計算は厳しい。	・お金の種類はわかる。五百円単位まで計算できる。
自立・コミュニケーション・遊び		・挨拶は上手・自分だけの世界に入ることがある。 ・簡単なトランプやゲームができる。	・身近な人との会話は楽しめる。なれていない人とは人見知りがある。トランプゲームや鬼ごっこができる。

表4 国語個別指導計画（抜粋）

	A		B	
	現 状	支援(検証授業1)	現 状	支援(検証授業1)
聞く	・簡単な説明、質問は聞くことができるが、説明が長いと落ち着かなくなる。	・周りの刺激に目がいかないようにカードやメモ書きで説明を行う。	・聞く態度は良いが、内容が理解できなくても返事しないことがある。	・返事は、挙手や小さな声で答えてもよいことを本人に伝える。
話す	・声の大きさは良く疑問等はすぐ聞く。オウム返しがある。・敬語も使える。	・落ち着かないときは、指示カードで注意を促す。	・声が小さく聞き取りにくいことが多い。質問しても黙って答えないことがある。	・ペア学習の中で話し合いをしていたらほめる。
読む	・詩、絵本等を楽しく読む。長い読みは棒読みになる。	・絵カードを読んで語いを理解させる。	・声が小さいため聞き取りにくい。・本をよく借りる。	・絵カードやワークシートは、声を出して読むようにさせる。
書く	・文字を大きく書く傾向がある。二重書きや字の間の取り方が狭い。 ・漢字級テスト小1段階	・マスの中に字をはみ出さずに書けるようにする。	・字がきれいで丁寧である。視写もできる。誤字、促音の脱字がある。主語、述語が一致しない。 ・漢字級テスト小2段階	・書いた文章を読み直し、間違い箇所の訂正をする。

② 「集中トレーニング」の実際

ア 作成した「絵カード」を使い、簡単な文章が書けるように「5W1H」方式を定着させることに重点をおいた。また、上手くできたら褒めるように心がけ、絶えず生徒の学習意欲を高めるようにした。

イ 絵カードの種類と語い

表5 絵カードの種類と語い

項目	いつ	どこ	だれ	何をした
内 容	・1校時 ・給食時間 ・帰りの会	・教室 ・美術室 ・保健室	・美術の先生 ・生徒 ・男子 ・女子	・計算をした。 ・色のぬり方を学んだ。 ・公園に行った。



図3 絵カード

ウ 「集中トレーニング」の視点

表6 集中トレーニングの視点

視 点	・導入時に使用するカードが生徒の実態を踏まえた教材であるか。
	・生徒の興味・関心に合ったカードであるか。
	・カードは、生徒の実態に合わせて改善されているか。

集中トレーニング（よくおぼえられる頭の体操で〜す！）

年 級 名 前

1. 今日のテーマ（ ）平成 年 月 日

(1) _____

(2) _____

図4 集中トレーニングシート

エ 集中トレーニングの実施方法

表7 集中トレーニングの実施方法

実 施 方 法	・題材のテーマになる語いの絵カードを10枚準備する。
	・2分間、速くフラッシュし集中して注目させる。
	・次に3分間、記憶した語いをワークシートに記入する。
	・正答数を棒グラフシートに記入する。

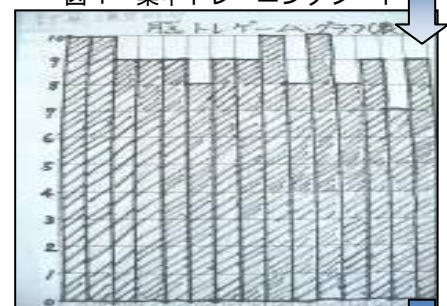


図5 棒グラフシート

オ 文章ワークシート作成上の留意点

学習内容を「5W1H方式」で絵カードに表し、それを組み合わせる文章構成ができるようにした。

カ 感想ワークシートの作成

授業の感想、ふり返りを簡単な質問内容で答えられるようにした。

感想ワークシート

年 級 氏 名 平成 年 月 日

課題のテーマ

質問(しつもん)

1. 先生の説明はわかりやすかったですか。（はい・少しわかった・いいえ）

2. 今日の「集中トレーニング(集中)」は楽しかったですか。（はい・少し楽しかった・いいえ）

図7 感想ワークシート

文章ワークシート

1. 絵カードを使って、正しい文章をしよう。

2. 4文ゲーム

男子 女子 五校時 1校時

た あそび 1校時 2校時 3校時 4校時

図6 文章ワークシート

③ 検証及び考察

検証授業1では、生徒の自立のために必要な「コミュニケーション能力」に焦点をあて、「相手に自分の思いを伝えることができる」ようになることを目標として、語いの定着を図る国語の作文指導を実施したが、絵カードと文章ワークシートに関して、次のような課題が挙げられた。

ア 絵カードの中には、絵から語いの意味を理解させることが難しいものがあった。

イ 絵カードを数多く準備したため、絵カードの組み合わせに時間がかかった。

ウ 絵カードに「助詞」を書き入れなかったため、文章ワークシートの学習では、「助詞」を適当に当てはめることができず、文章構成がうまくいかなかった。

エ 文章ワークシートの問題数が多く、時間内に終わることができなかった。

(2) 検証授業2

題材：「グランドゴルフ大会の思い出をまとめよう」（生活単元学習）（平成22年1月14日）

検証授業1の課題解決のため、アセスメントを再確認し支援の方法を改善した。

① 支援方法の改善

表8 国語個別指導計画（抜粋）

	A			B		
	現 状	支援(検1)	支援(検2)	現 状	支援(検1)	支援(検2)
聞 く	・簡単な説明、質問は聞くことはできるが、説明が長いと落ち着かなくなる。	・周りの刺激に目がいかないようにメモ書きで説明を行う。	・メモ書きをせず、口頭で理解できる写真カードを準備する。	・聞く態度は良いが、内容が理解できなくても返事しないことがある。	・返事は、挙手や小さな声で答えてもよいことを本人に伝える。	・教師や周りの生徒の声かけで理解しているか確認をする。
話 す	・わからないとすぐ質問をする。オウム返しがある。敬語は上手である。	・落ち着かないときは、指示カードで注意を促す。	・適切な返答ができたらほめる。	・声が小さく聞き取りにくい。質問しても黙って答えないことがある。	・ペア学習の中で話し合いをしていたらほめる。	・周りの生徒に、ほめてあげるように指示する。
読 む	・詩、絵本等を楽しく読むが、文章が長くなると理解できず棒読みになる。	・絵カードを読んで理解を深めさせる。	・写真カードの語いを読んで理解できるようにする。	・音読は、声が小さいため聞き取りにくい。	・絵カードやワークシートは、声を出して読むようにさせる。	・発表の場を多くし、音読に慣れさせる。 ・声が出たらほめる。
書 く	・文字を大きく書く傾向がある。二重書きや字の間の取り方が狭い。	・マスの中に字をはみ出さずに書けるようににする。	・ワークシートが書きやすいように個人用写真カードを準備する。	・字がきれい丁寧である。視写もできる。誤字、促音の脱字がある。	・書いた文章を読み直し、間違い箇所の訂正をする。	・協同学習の生徒とワークシートをチェックさる。

② 学習プログラムの改善点

ア 学習プログラムの改善の内容を個別の指導計画（表8）の次の支援の欄に明示した。

イ 語いが理解しやすいように、検証授業1の「絵カード」を次のような「写真カード」に改善した。



図8 絵カード

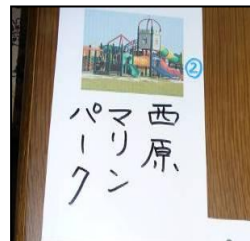
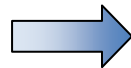


図9 写真カード



図10 個人用写真カード

ウ 文章ワークシートの枠の中に助詞を記入して作成した。

③ 検証及び考察

検証授業2においては、生徒が理解しやすいように視覚教材の工夫・改善を行った。今回取り入れた「写真カード」は、写真により語いを理解することができるので、生徒にとってわかりやすいものであった。また、ワークシートにも、語いを書き入れる枠の中に助詞を記入して作成したことで、文章が書きやすくなり生徒も集中して取り組んでいた。

④ 検証授業2の実施後の課題

写真カードや文章ワークシートの作成において、生徒の言語活動がまだ不十分なところがあり、支援方法の改善が必要である。

(3) 検証授業3

題材：「グランドゴルフ大会の感想をまとめよう」（国語）（平成22年1月22日）

検証授業2の課題を解決するため、言語理解能力発達の状況を検査するための絵画語い発達検査や読書力診断テストを行った。その検査結果から、写真カードもわかりやすく具体的なものを使い、さらに、文章ワークシートにも写真を入れて改善を試みた。

① 生徒の検査結果による支援の改善

生徒の言語活動を向上させるために、支援方法の改善を行った。

表9 生徒の諸検査結果による支援の改善（抜粋）（平成21年12月実施）

	検査からの実態の分析	行動観察の分析（学習・授業）	支援(検証授業3)
A	- 語い年齢・・・6歳1ヶ月 - 読書年齢・・・7歳 - 社会生活年齢・・・7歳5ヶ月 ○生活で使う言葉のやりとりはできる。語いの獲得が不十分で、書いて覚えることが苦手である。	- 教科内容によって集中度にムラがあり一定しない。（作業学習の畑作業等） - 落ち着かない時、手遊びや体ゆらしがある。 - わからないことや満足できない時には、場に関係なくオウム返しや質問が続く。 - 発表は声がよく聞こえる。 3文節までは支援されて書ける。	- わかりやすい言葉を選んで説明をする。 - 学習活動の手順を簡単にする。 - 本人用のカード教材や写真入りのワークシート、スケジュール表を作成する。 - できたことをほめる。
B	- 語い年齢・・・7歳10ヶ月 - 読書年齢・・・7歳7ヶ月 - 社会生活年齢・・・11歳4ヶ月 ○言語表現が不十分であり、会話や日誌などの記入へ適切な言葉で表現できないことがある。	- 質問して答えられないと、緘黙してしまう。 - 発表はほめることを多くすると、少しずつ声が出せるようになった。 - 誤字・促音や言葉が抜ける。 - 一人で簡単な文章は書ける。 - 主語と述語がかみ合わないときがある。	- 体験学習により、知識を獲得し、記憶化ができると考えられる。 - カード教材を利用することで、興味・関心を広げ、学習へつなぐ。 - わかりやすいワークシートの作成。適切な問題数。 - 発表の場を多くし、声が出たらほめる。

② 「集中トレーニング」で使用したカード教材

表10 カード教材

カード名	方法	効果性	本研究の目標
絵カード (図8) 検証授業1で使用	- 題材で扱う語いを絵入りカードで作成する。 - 声に出して速く、10枚をフラッシュする。 - 静かに進める。	- 絵と語いの一致から理解が得やすくなる。 - 短時間でフラッシュするので、注意力と集中力が鍛えられる。	- 導入で絵カードを見せる。（短期記憶の形成） - 学習活動で絵カードを活用することにより、ワークシートへの記入に語いの理解と定着が図れる。（長期記憶の定着）
写真カード (図9・10) 検証授業2・3で使用	- 題材で扱う語いを写真入りのカードで作成する。 - 声に出して速く10枚をフラッシュする。 - 静かに進める。	写真と語いの一致がより具体的なイメージを生み出し、語いの意味がより理解しやすくなる。	- 写真を入れると、より具体的に語いがイメージできる。（短期記憶の形成） - 写真カードで、ワークシート(図11)への記入が速くなる。（長期記憶の定着）

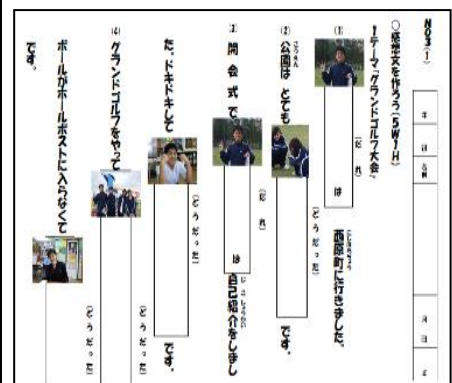


図11 写真入りワークシート

③ 検証授業3の授業実践

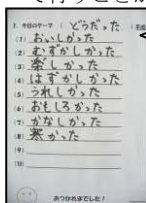
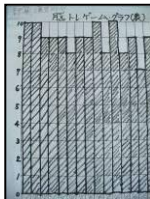
流 れ		生徒の学習活動と教師の働きかけ	☑は特に行う支援	評価の観点
導 入 ・ 10 分	5 分 「集中 トレー ニング」 「どうだ った」の語 いを覚えよ う	- 今日の「学習プログラム」の確認を行う。（学習内容の掲示） 「集中トレーニング」で写真カードのフラッシュ 10 枚を見る。 - 写真カードの語いを覚える。 - 集中トレーニングシートに記入する。   	 	- 指示カード等を見て学習内容を理解できる。 「集中トレーニング」を集中して行うことができる。
	5 分 評価	正解を見て○をつけ、点数をグラフに記入する。 ☑グラフの記入が正確にできているか確認する。		- 学習内容を理解できる。 - グラフ記入が正確にできる。 
展 開 ・ 35 分	10 分 「グランド ゴルフ 大会」 の写真 を見よう	2 人一組で、向かい合わせのペアを 2 組作る。（縦と横） ☑Aさんは黒板の写真で気が散らないように、黒板に背を向けた席 - 学習活動の流れを掲示したカードをはる。 「5W1H」のことばの意味を、黒板の写真を見ながら再確認する。 ☑Aさん専用の写真カードを準備する ☑教師の質問に答えられたら、すぐほめる		- 学習活動の流れにそって行動できる。 - 文章ワークシートの使い方を指示にそってできる。
	25 分 「どうだ った」 文章 ワーク シートへ 記入しよう	- 写真カードを使い感想文ワークシートへ記入 - 写真入りの文章ワークシートの生徒、文節の多いワークシートの生徒、3 文節までのワークシートを実態に合わせて配布 ☑写真カードを 2 つのペアに合わせて配布する ☑「5W1H」の意味に合ったことばの正解になっているか机間巡視で声かけをする - 文章ワークシートが完成した生徒は教師が採点をし、合格シールをはり激励する。 - 文章ワークシートの中に、自分の考えで書ける枠を入れておき、状況を見てできそうなら、声をかける。		- 写真カードを使って、文章ワークシートの使い方を理解でき、学習活動を主体的に行える。 - 誤字・脱字がなく文字を書け、チェックができる。 - 協同学習ができる。 - わからない時は質問することができる。 - 報告ができ、次の行動へ移ることができる。
ふ り 返 り	5 分 まとめ 終わり	- 頑張ったこと、達成できたことをほめる。 - 感想ワークシートへ記入する。 - 終わりのあいさつ		- 達成できた喜びを味わう。 - 感想ワークシートへ記入できる。

図12 学習指導案(略案)

④ 他教科の「集中トレーニング」で使用した単語カードやドリル教材の例

表11 社会、国語、数学で使用した教材

教材名	方 法	効 果 性	目標の設定
単語カード (社会)	・題材で扱う語いをカードで作成する。 ・声に出して速く、5～10枚をフラッシュする。 ・静かに進める。	・繰り返すことで、都道府県名を覚え、定着できる。	・日本地図の理解と都道府県の位置がわかる。
ドリル教材 (国語・数学)	・漢字の書き取りや計算練習の簡単な問題を作成する。 ・10～15問等の問題数で5分、静かに進める。	・簡単な問題を解くことで正解率が高く、充実感を味わえる。	・漢字の書き取りや計算問題ができるようになる。

IV まとめ

1 仮説の検証

- (1) 集中トレーニングを取り入れた授業実践を行ったことで、学習内容の理解度が速くなり時間内に終わることができた。このことは、生徒の集中力・注意力・記憶力が高まり学習意欲につながったと考える。(図①・②・⑤)
- (2) アセスメントに基づいたことで行動の改善が見られたことは、自立の力に近づいていると考える。(図②)
- (3) 生活日誌の記入行数が増えたことから、学習意欲の高揚と自立につながるコミュニケーション能力の高まりにつながったと考える。(図④)

2 成果

- (1) 検証授業を通しての生徒の変容を次のグラフで示した。なお、グラフのA～Dは生徒を表す。

① 導入・展開・ふり返りに要した時間

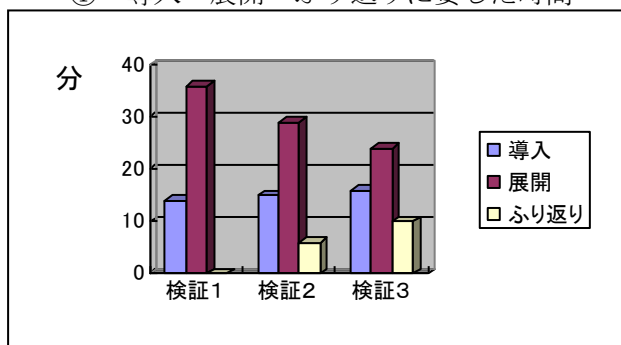


図 13 時間配分の変化

② 生徒Aの気になる行動

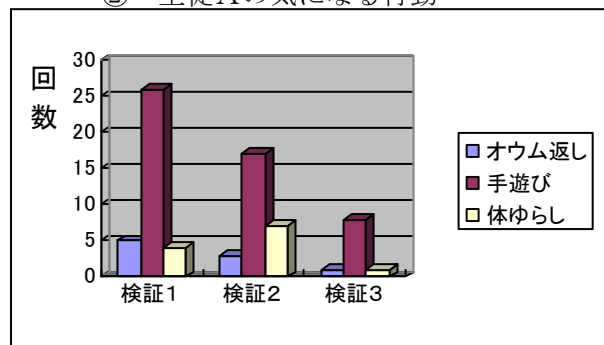


図 14 気になる行動の変化

③ 生活日誌の促音・長音・拗音の誤記入数

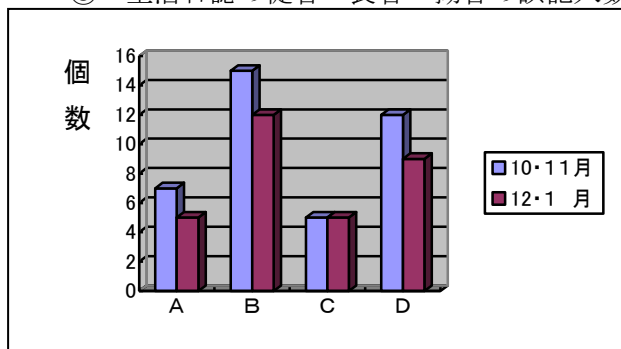


図 15 促音・長音・拗音の誤記入数

④ 生活日誌の行数の変化

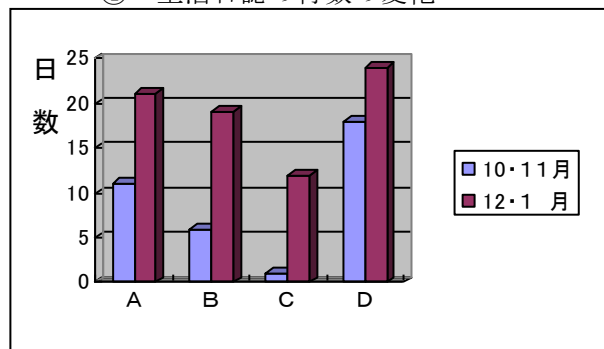


図 16 日誌文の5行以上の日数

⑤ 文章ワークシートの点数

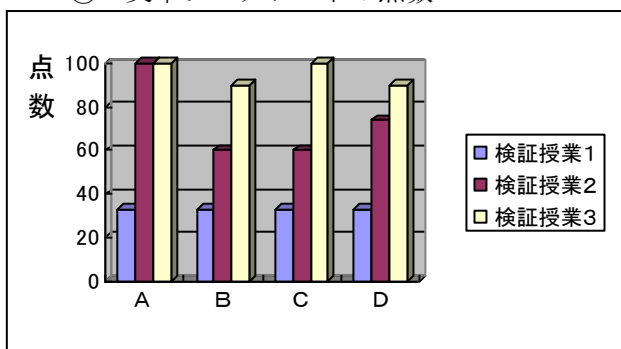


図 17 文章ワークシート点数

<①～⑤のグラフの説明>

表 12 グラフから見た生徒の変容

①	授業改善を行ったことで、学習内容の理解度が深まり、時間内に終わることができた。
②	アセスメントに基づいた教材・教具を用いたことで、集中して学習することができ気になる行動が減少した。
③	文章から誤記入が少しずつ減ってきており、以前より注意力がついてきた。
④	5行以上記入できた日数が増え、その日の出来事が書けるようになった。
⑤	生徒の実態にあったワークシートを活用したことで、回を増すごとに理解度が増した。3回目の検証授業では、2枚のワークシートを時間内に終え、点数もかなり伸びてきた。

(2) 学習活動における効果

- ① 「集中トレーニング」では、読み・書き・計算等や視覚教材により集中力・注意力がついた。
- ② 生徒本人に学習の結果を評価させることにより、生徒の達成感や成就感が見られた。
- ③ 学習の展開では、カードやワークシートを改善し、学習の内容をわかりやすく工夫したことで、ワークシートへの記入が速くなり、正答率が上がった。
- ④ 学習活動後の感想が書けなかったが、検証授業3では、まとめの時間内に記入できるようになるなど、文章力がついてきた。
- ⑤ 感想ワークシートで、研究の実施効果を確認することができた。
- ⑥ 生徒は、展開、ふり返りの学習活動に積極的に取り組むようになった。
- ⑦ 生徒は落ち着いて学習に取り組めるようになり、協同学習で助け合い、ファイルの配布を率先して行うことや発表の場で、自ら考えて伝えようとする姿勢等の主体的な学習活動ができるようになった。

(3) 生徒の生活・行動面の変容について、学級担任・教科担任及び保護者の声を次の表にまとめた。

表 13 生徒の生活・行動面の変容

生徒	検証前の実態	生徒の変容			目指すべき自立活動の内容項目
		学級担任より	教科担任より	保護者より	
A	・オウム返し等がある。 ・生活日誌の記入が少ない。	・わからない時、不安な時にしていたオウム返し等が減った。 ・短い会話ができるようになった。	・積極的に話をしたりする行動が見られるようになった。 ・スケジュール表を見て、生活日誌が、書けるようになった。	・学校からの諸連絡等を話しでできるようになった。 ・自分の言いたいことが言えるようになった。	・「心理的な安定」 ・「人間関係の形成」 ・「コミュニケーション」
B	・緘目がある。 ・活動全般が消極的である。	・漢字検定の申し込みを自主的に行った。 (平成22年1月29日受験) 9級合格。 ・質問によく答え、声も大きくなった。 ・自分から進んで友人、後輩に声かけするようになった。	・歌がしっかり歌えるようになった。 ・自分を主張する場面が見られるようになった。	・手伝いや勉強を進んで行うようになった。 ・友達と一緒に買い物をするなど積極的に行動できるようになった。	・「心理的な安定」 ・「人間関係の形成」 ・「コミュニケーション」
C	・生活日誌の記入がワンパターンである。 ・学習意欲が乏しい。	・生活日誌について、段落をつけることが増える等、向上が見られた。 ・家庭学習を行い、学習ノートを提出するようになった。	・主体的に後輩にアルトリコダーを教えることができる。 ・質問ができるようになった。	・進んであいさつをするようになった。 ・会話が多くなった。 ・家庭学習をするようになってきた。	・「人間関係の形成」 ・「コミュニケーション」 ・「心理的な安定」
D	・消極的な態度が多い。	・漢字検定9級の受験申し込みを自ら行い、合格した。(平成22年1月29日受験) ・当番以外の活動も進んでやるようになった。	・リーダー性を発揮してきた。 ・授業での発言が多くなった。	・積極的に話をするようになった。 ・進んで勉強するようになった。	・「コミュニケーション」 ・「人間関係の形成」

※表13の自立活動の内容には、「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の保持」、「コミュニケーション」の6項目がある。

3 課題

- (1) 「集中トレーニング」で扱う教材は、絵カードや写真カードを中心に行ってきたが、ワークシート学習との関連性を踏まえて、カード以外の方法や題材の精選等の研究も必要である。
- (2) 各教科の題材に適した教材・教具の研究を深めていく必要がある。
- (3) 「集中トレーニング」による学習の効果を確かなものにするためには、多くの生徒を対象とした実践研究が必要であると考えます。

<主な参考文献>

特別支援学校学習指導要領解説・総則等編 2009 (幼稚部・小学部・中学部) 文部科学省
 上嶋恵 2008 教室でできる特別支援教育 1分間 集中トレーニング 学陽書房
 川島隆太 2002 「読み・書き・計算が子どもの脳を育てる」 子どもの未来社